慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ケネーとアダム・スミス
Sub Title	
Author	瀧本, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.6 (1926. 6) ,p.691(1)- 709(19)
JaLC DOI	10.14991/001.19260601-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260601-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

開店御披露のため本月中
實費御調製可仕候夏服の
御用命は是非當店へ

三田四國町七ノ七
（豐國銀行横）
慶應義塾御用 桑原洋服店
電話高輪三九一四（呼出）

メガネ
の御用は
正確にして
廉價な

慶應大學病院指定
紫鳳堂眼鏡店
麻布材木町電停際
電話青山七四七〇番

三田學會雜誌 第二十卷 第六號

ケネーとアダム・スミス

瀧本誠一

近世經濟學の開祖アダム・スミスの學説は、他の學科の開祖と同じく、全然獨立の思想に出てたるものにあらず、矢張多くは或る先驅者の思想を紹述發達したるものに外ならざることは勿論であるが、此の點に關し、從來一般に傳へられたる通説は彼の大著作富國論に現はれたる意見の要旨は主としてフィズィオクラット(Physiocrat)の學説に淵源すると云ふのである、而して佛國の學者は特に之を誇張して、スミスのフィズィオクラットに負ふ所甚た多大なることを吹聽し居るも(Gide & Rist. History of Economic doctrines Eng. trans 1915. p. 55)其の實必ずしも彼等が言ふ程でもなからうと思はるゝが、兎に角スミスはケネー(Quesnay)の説の不完全なる

ことを痛く指摘して居るに拘はらず、其の根本思想に於て彼の勢力を蒙つて居ることは掩ふ可らざる事實であらう、現にスミスが富國論第四編の第九章（キャナン版第二卷一七六頁）に於て「此の學派の說は不完全なる所少なからざるも從來世上に發表せられたる經濟學說中最も眞理に近いものであらう、故に此の極めて重大なる學問を精細に研究せんと欲する者は彼等の說の檢討を忽せにすべからず」と云つて居り、又彼が富國論はケネーにデディケートして彼に對し敬意を表する積りであつたが、不幸にしてケネーの死去に依つて其の目的を達しなかつたと云へる事實（McCulloch. Treatises and Essays 中のケネー傳及其著書參照）などに徵しても、スミスがフィズィオクラットの學說の感化を受けたることの淺からざるべきは推測に難からないのである。

シモン・バテンは其の名著 Development of English thought に於てスミスの富國論は著者が佛國滯在中（一七六三年―一七六六年）に其の腹案を立てゝ、草稿の大部分は現に同地に於て執筆し居たるものなりと云へる通說を排し、佛國へ出發前に出版されたる Moral Sentiments（一七五九年）に於て、スミスは「倫理哲學の二つの重要なる部分は倫理學と法理學である」と云つて居ると前提し、スミスがモラル・センチメンツに於て新たに他の一書を著はすと云ふことを約束して居るのは固より經濟學の事を云つたのではなく、國法及政治の一般的原理に關する說即ち正義（Justice）治安（Police）財務（Revenue）軍事（Arms）及其の他何事にても、法の對象となるべきものを論述したる著作を約束したるに外ならざることを辨明し、彼が佛國に赴きたるときは、經濟學者ではなくして倫理學者であつたのである、其の滯在中に或はフィズィオクラットの說を聞きたることもありしなるべく、又自ら佛國の經濟事情を視察して、多少得る所ありしなるべければ、彼は歸國の後是等の新刺擊を受けて、經濟學の進路に向ひたることは疑ひなしと雖も、而かも此の倫理學者を經濟學者に變化せしめたるには長き容易ならざる進化發達を經ねばならなかつたのであらう、故にスミスが結局遂に大經濟學者と爲り了せたるは、何人に歸依して改宗したるものでもなく、全く偶然に經濟學者となつたのである、故意に目指す所あつて（By Design）變化したのではない云々（English thought 二三一―二頁參照）と論じて、スミスの經濟學說のフィズィオクラットに負ふ所多大なりと云ふ通說に反對し居つて、

近頃我國の經濟學者中にもパテンの此の意見に雷同する者あるようなれども、余の見る所ではパテンの反對は議論甚だ薄弱にして、從來の通說を打破するに足らざるのみならず、其の論據とする事實に於ても頗ぶる不備の點を免かれないようである。

パテンはスミスが約束したる新らしき著作（パテン等は此の著作を a new work と云つて居るもモラル・センチメンツの本文には another discourse とあり）は Economics にあらずして Law and Government に關する一般的原理の著作であると論じて居るも、彼の所謂る Economics なるものは勿論富國論を意味するものゝ如く思はるゝが、果して、それであるとすれば、此の富國論がスミスの約束の全部ではなかつたとしても、其の重要の部分であつたことは明白であつて、其の事は余の辨する迄もなく、モラル・センチメンツ第八版の自序（此の序文は第六版發行の時の自序なるべしと思はるゝが、余は私藏の第八版に據る）に「富國論に於て余は此の約束の或る部分を履行したり、少なくとも治安、財務、及兵事に關することは履行した積りであるが、後に殘る所は余が長く考案して居つた法理學說である、これは余今年老ひて、此の大事業を滿足に成功し得るや否覺束なきも、而かも猶當初の計畫（design）を放棄しないで、有らん限り努力して義務を果す積りであるから、此の約束の文は三十年前の通りこの儘に存し置く」と云つて居るのを見れば、スミスの富國論が其の約束の重大なる部分であつたことは固より論を待たないのである。尤も富國論の中にはこの約束に沒交涉の問題即ち純乎たる經濟上の問題に過ぎざるものも多々あることは勿論なるも、スミス當時の經濟學は政治學と混同して居つて彼は之を二つに篩ひ分けた最初の第一人者であると稱せらるゝも、尙それでも彼の富國論は所謂る國を富すの學問であつて、ドウかと云へば經濟學書と稱するよりは寧ろ政治學書であると云つた方が適當かも知れないのである。故に彼が Law and Government と云ふ言葉の中には富國論中に取扱はれて居る問題の大部分が籠つて居ることは明かである、經濟學が獨立の學問となつて極端に分化した今日に於ては正義治安、財務、軍事其他國法學の對象となるべき事項などの中に經濟問題が一緒に取扱はれてあると云ふは、聊か不可思議の感なきにあらざるべきも、スミス時代には如何なる學科も大抵皆此の樣に混雜を免かれなかつたのである、然らばスミスが佛

國へ漫遊する四年前に出版されたるモラル・センチメンツに豫告したる約束中には國法及政治の事のみで、富國論は籠つてないのであるから、彼は佛國には倫理學者として行つたのであつて、其の時も猶未だ經濟學者ではなかつたのである、隨つて佛國滯在中に富國論の腹案が出來て居つたとなどと云ふのは誤りであると、斷言したのは甚だしき不穩當の結論であると云はねばなるまい。

然れどもバテンが此の論法に依つてスミスの富國論が佛國滯在中に書かれたものではなからう、蘇格蘭へ歸りたる後自國の經濟狀態を看察して、段々と多くの材料を集積し、思索檢討、次第に進んで此の大著作たる富國論が成就したのであると云つて居るのは、必ずしも否認するに及ばずと雖も、バテンが此の說を根據として、スミスの經濟思想にフィズィオクラットの感化が及ばなかつたことを立證せんとするは最も誤謬の極みであらう、何となればスミスが佛國に赴く以前には純乎たるモラリストであつて、經濟學の素養は曾て少しも之れなかつたからと云つても偶然或何等かの刺擊により二年三年の後に、立派な大經濟學者となり得られざる理由はなかるべく、又バテンはスミスがモラリストであつてエコノミストではなかつたと云ふことを頻りに高調し居るも、モラリストとエコノミストとは親子兄弟の間柄より、猶一層親密であつて、モラリストがエコノミストに早變りし得らるゝは寧ろ至當の順序である、のみならず、スミス時代に於ては經濟學は政治學と同じく Moral Philosophy なる範圍の廣き學科の中に綜合せられ、現に富國論、否少なくとも其の重要なる大部分は、彼が佛國漫遊前に公にしたる Moral Sentiment's や、其の死際まで未定稿となつて居つた Jurisprudence に關する著作などゝ與に綜合して、一つの大なる倫理哲學を大成する積であつたことは、彼自ら明言し居る通りの次第なれば、バテンが言へる如く、モラリストとしてのスミスが、エコノミストとしてのスミスに變ずる迄には、彼の思想上に幾多の發達變遷を要したであらうなど云ふ樣なおつくふなことでなかつたことは推測に難からないのである。故に此の點に於けるバテンの說明は論據洵に薄弱にして、スミスの富國論がフィズィオクラットの學說に負ふ所多大なりと云ふ通說を打破するに足らないと思はる。

加之ならずバテンはスミスの思想が根本的にフィズィオクラットの說と異つて居ることを立證せんが爲めに『英國のモラリスト（ヴィット、ヒュウム等を指す）

は人間の天性に屬する素因を高調し、彼等が其の周圍の環境に服屬順應すべしと云へる說には常に反對して居つたのである、ヒュウムは National characters と題する論文中に「有象界の諸因は人間の精神上に明徵すべき作用を爲すものにあらず」と云つて居るが、彼は元來「人間の氣質が空氣、食物、氣候等に左右せらるゝもの」とは決して考へて居なかつたのみならず、尙進んで「我々が此の地球を踏み超へ、人間の歷史を覆がへし得ても、天性の同情心や忌々しき惡德の氣質は空氣や氣候の勢力に拘はらず常に何處にも發見し得らるゝであらう」とまで斷言して居るのである、而して斯くの如き思想は佛國に於て此の當時モンテスキュウの感化力に依つて大に行はれつゝあつた環境論の主趣とは全然反對であつたのであるが、此の環境論は佛國には盛に行はれたるも、英國にては丁度正反對に大に嫌はれたのであつて、而かもスミスは之を嫌つた中の一人なれば彼が斯る反對派の學說に感化さるゝ筈は決して之れなかつたのである。殊に社會の純生產は唯た土地より生ずるものである、自然の働きのみに歸するものであつて人間の働は、曾て之に與からないと云へるが如き學說などはスミスの哲學の根本思想に反するものなれば、若し此の上更らに「自然の助力を得ざる人間は全然不生產的である」と云ふ反對派の極端なる主張を加へて、推斷するときは、スミスの思想に合致せざる他の多くの學說が、佛國に流行の環境說に感化されて、富國論に現はれたなどゝは萬々想像し得られないことである」云々と云て（English thought 二三〇頁及二三一頁參照）フィズイオクラットの學說がスミスに及ぼしたる勢力の多大ならざることを立證せんと試み居るも、余は是も亦バテンの誤解であると信ずるのである。

バテンはフィズィオクラット就中ケネーの學說を以てモンテスキュウ一派の環境說に與みし、空氣、食物、氣候其他周圍の狀況に依つて、人間の氣質が陶冶形成せらるゝものゝ如く主張したるものと認めたるも、余の知る所ではケネーは決して斯くの如き環境論を唱へたるものにあらず、彼は其の著作の所々に於て Loi Physique, Loi Morale などの語を使用して、物理的法則と道德的法則との關係を論述し、又 l'ordre Moral の l'ordre Physique に適合せねばならないことを高調して、自然法の基礎觀念を說明し、有象界の物理的法則の違反が無象界の道德的法則の破壞を意味することを極力主張し居ることは事實なるも（オンケン出版全集三五九頁以下參照）これ

はモンテスキュウの環境論とは全然其の立脚地を異にし、人間の性質、氣風が物理的環境（食物や氣候など）に依つて形成せらるゝと云ふの意味にあらずして、人間は他の萬物と同じく何れの場所何れの時代にも普遍不易なる天賦の propriétés essence を有し、此の本質を完成するが爲めに造物者は特に人間に賦與するに理智を以てしたのである、故に人間は此の特權に依つて自然法を遵守するの道を知らねばならないと云ふことに歸着するのである、彼が所謂る物理的の法則若くは物理的の秩序なるものは造物主の定められたる不易の法則であつて、人間は義務として之に順ふべしと云ふだけの事である、トマス・バックルなどがモンテスキュウの後に其の說を繼承して、例へば熱帶國の人間は天變地異其他自然の壯嚴なる威力に打勝つこと能はずして、自ら迷信に富み、想像力（Imagination）を逞しふするの傾向あるも、溫帶若くは寒帶國の人間は人力を以て自然を征服し、想像力よりは寧ろ理解力（Understanding）を勵ますの氣風を生ずるのであると論じて居る樣なる環境論とは、全然其の性質を異にして居ることはケネーの著作を一讀すれば自ら明白である。

ケネーは自然法論第三節の末文に於て、各人は總て自分の置かれし境遇に應じ、自分自身をも又他人をも害しないと云ふ條件の下に天賦の能力を使用するの自然權を有すると云ふことを辨明し居るも、これとてもモンテスキュウ一派の境遇論とは全く沒交涉であつて、彼れは何くにもモンテスキュウ一派の意見を採用して居るような形跡は見へないのである。ケネーの此の點に於ける根本思想は寧ろ支那流儀の天人感應說に近くして、人事の變が天に感通し、人君が其の德を失すれば日月蝕し、宰相其の職を曠くすれば凶荒臻るなどゝ云つた樣な感應說であつて、モンテスキュウやバックル等の如き環境論でなかつたことは明白である、ケネーの此の點に於ける所論は自然法の思想に基ける純乎たる抽象的の斷定に外ならないのであるから、バテンが云へる如くモンテスキュウの勢力に因つて佛國に流行したる環境說はケネーの思想とは正反對なれば、空氣、食物、氣候等が人間の本然の氣質を變化せしむると云つたなら、ケネーは確かにヒユウムと與に、否それよりも一層熱心に反對したであらう、之を要するにバテンが此の問題に關する評論はモンテスキュウ一派とスミスの關係に就ては或は痛切に當候るべきも、フィズイオクラット殊にケネーに對しては見當外れの評論であつて、スミスが環境論な

どに耳傾けず、人間の天賦の本能を出發點として、一直線に進んだものとすれば（バテンの評の如く）其の點は正しくケネーの根本思想に合致するのである、スミスが自然法學者として如何なる地位を占むるかは今日猶ほ疑問に屬するも、彼が世上に自然法論者として認めらるゝ程の色彩を有して居つたのにはフィズィオクラットの感化力が與かりて力なかつたとは、一概に斷定すること能はざるが如し。

スミスの經濟學說の缺點は彼自身の當時に於て最も進步發達し居たる英國の産業社會を對象となし、同國を永久的の模範經濟國として抽象的に立論したことであると云ふことが、一般の通說であつて、彼は自身が眼前に目擊して居る英國の經濟制度も唯た其の時代に順應する經過的の一段階に過ぎないと云ふことに氣付かなかつたのである、故に彼は人間社會の現象に關する學說に就いて往々陷り易き大失錯の一つを冒したのである、即ち英國の産業界に於て目擊せる經濟制度が恰も永久的模範であるかの如く見ゆるに依り、其の必然の結果總ての經濟制度を靜態的のものとして取扱ふに至つたのであると論ずる者あるも（A. W. Small の Origins of Sociology. 一四〇頁及一四一頁參照）余を以て之を見れば斯くの如き論斷は原因と結果とを顚倒したる論法であつて、スミスは既に普遍不易なる自然法の存在を前定し、あらゆる經濟上の現象は皆この動かざる自然法の働きに歸因するものゝ如く思惟し居たるが故に、佛國より歸國の後英國の經濟狀態を詳かに觀察する以前より、彼の頭は自然法の信條に依つて固められ經濟制度その物は必然的にStaticのものであると考へて居つたのであらう、英國の經濟制度を見誤つて永久的のものと思惟したるを以て總て他の經濟制度を靜態的のものとして取扱つたのではなく、自然法より割出して總ての經濟制度は靜態的のものと思惟し居たるが故に英國の經濟制度を永久的のものと見誤つたのであらう、例へば茲に人あり、汽車に乘つたが爲めに大阪へ行つたのではなく、大阪へ行んが爲めに汽車を撰んだのである、目前に利刀があつたが故に人を殺したのではなく、人を殺さんが爲めに利刀を用ひたのである。スモールの言の如く、スミスは英國の經濟制度を其の時代に順應する經過的のものと思はなかつた、夫れ故に（consequently）彼は總ての經濟制度を必然に靜態的のものとして取扱つたのであると云へば、是れ汽車に乘つたが爲めに大阪へ行き、利刀を見たが故に人を殺したのであると云ふの論法に

して、其の人の行動は洵に無意義の行動である。バランが「スミスがモラリストよりエコノミストに變化したのは偶然（He became an economist by accident, not by disign）であると云へるは、此の意味であるや否は知らざるも、兎に角余は矢張り從來の通說の如く、スミスの經濟思想はフィズィオクラットに負ふ所多大なりと信ずる者である。

スミスの富國論に現はれたる意見の重要なる大部分がフィズィオクラットの學說に基くと云つたら、或は聊か不穩の感なきにあらざるべし。スミス學派の最も有力なる紹述者ジャン・バチスト・セーは佛國人として大にケネーの勢力を誇示すべき地位にありながら其のスミスに及ぼしたる勢力を餘り重大なりとも認めて居らず、又富國論の古き出版者の一人として著名なるプレーフェヤの如きは猶更ら一層冷淡に此の問題を取り扱つて、フィズィオクラットの貢獻の大ならざりしことを信じて居たるのみならず、其の他の大家中にも往々此等の人々と其の所見を同ふする者なきにあらざるも、而かも前に述べた如くスミス自ら富國論に於て「ケネーの說は經濟學說中最も眞理に近きものである」と贊稱し、又其の富國論をケネーに捧げんとしたるが如き事實に徵すれば、スミスが斯くの如く推服し居たる先輩の著作若くは馨咳に接して多大のヒントを與へられたることは推測に難からないであらう。勿論富國論中の根本思想が多くケネーの學說に符合する所ありとて、直ちにそれを以て兩說の因果關係を斷定すること能はざるは固より論を待ざるも、富國論を構成する骨組は主としてフィズィオクラットに負ふ所多かりしことは蔽ふ可らざる事實である。ジードが「スミスの佛國遊歷以前に於ける經濟學說を見るに足るべきグラスゴー講義錄に於ては、彼は生產の科目の外には殆ど何等の問題にも觸れてなかつたのであるが、佛國より歸國の後に現はれたる富國論には分配の科目に重大なる位地を與ふるに至れること」を指摘して、此の發達の理由はスミスが佛國に於て Tableau économique を熟讀し、純生產物の說を吹込まれた結果であると推定するより外なしと云つて居るのは、Gide and Rist 共著經濟學說史五五頁）少しく想像に過ぐるなきかと思はるゝもケネーの感化力がスミスに及べることの可なり大なるべきは少數なる詭辨家の外何人も疑はざる所であらう。

ケネーの論法は特種の形式に依つて言ひ顯はされ、深遠にして而かも極めて複

雜なる議論にても、僅々數行の短文章を以て簡單に叙述するのが、彼の特徴とする所であつて、夫の有名なる經濟表は云ふまでもなく、其の他重大なる經濟學理を含有する大論文は多くは皆支那流儀の格言若くは表の中に括約せられ、輕々に看過するときは殆んど何の意味だか分らないことが屢々ありて、是は後世我々の眼より之を視れば、ケネー一流の著作の一大缺點なるべしと思はゝも、學理の研究に沒頭する者が、忍耐力を鼓舞して詳かに之を檢討するときは、彼等の極めて簡單なる語言の中に、スミス以降近世の經濟學者が數千萬言を費やして縷述したる大議論の種子を見出すこと決して少なくないであらう、例へばクラシカール・エコノミストの經濟學を構成する富の四分科、即ち生産、分配交換、消費の四科目に分類するの慣例はフィズィオクラットの三分類（生産、分配、消費）に基きたものなるべく、價値を實用價値と交換價値との二つに分けたのはアリストウトレス以來のことであつて、必ずしもフィズィオクラットの剏見とは云ひ得べからざるも、比較的精確に之を區別して價値の研究に科學的の形式を提供したものは彼等である、消費を二つに分けて、生産的消費と不生産的消費に區別することも、彼等に依つて特に高調せられたことは言を待たないのである、富の概念を有形物に限り、其の要件として交換性（Exchangeability）の缺く可らざることを主張し始めたのも彼等である、貿易釣衡說に關するマーカンテリストの誤謬を排斥し、對外貿易の性質は賣買双方共に損するものにあらざることを最先に聲明したるものは彼等であつたのである、總て是等の如き學說の大部分が概ね皆彼等の所論中に散見することを詳かに看察し、且つ其の上に加ふるに身體の自由、言論の自由、商業貿易の自由、自由競爭、自由放任主義を以て經濟政策の極意とすべきことを高調したるが如き事實を綜合して結論すれば、スミスの富國論の骨子と認むべき重要の學說は、大抵皆フィズィオクラットの學說に於て其の種子を見出し得らるゝが如し、スミスの引用する歷史上の事實及其の當時に於ける英國の經濟狀態などは、勿論彼が佛國より歸國の後十數年間に自ら蒐集したるものなるべきも、彼が腦裏に蘊蓄せる主義主張の大要はフィズィオクラットに淵源すると云ふも、過言ではなからうと思はる。

スミスがフィズィオクラットの意見に正反對であつたと云はれて居る最も主要の點は、後者が農業のみを以て生産事業であるとし、商工業は生産物に對して何

等の價値を增加するものにあらずと云へる事を否認して、商工業も農業と同じく純生產即ち剩餘價値を生ずるものであると云ふの意見を主張したのであつて、此の點は確かにスミスのケネー等に超越したる所以なるべしと雖も、遺憾の事には此の點に於ても、スミスは其の後リカード其の他の人々に依つて、明かにせられたるレントの說を知らなかつたが爲めに、ケネーの誤謬は覺つて居つても徹底的に其の反對の理由を明にすることは出來なかつたのである（マカロック版富國論三〇五頁下註參照）ブルーガム（Brougham）のスミス傳に依れば著者はスミスがなせる生產勞働と不生產勞働との區別を指摘して甚だ不徹底不明晰であると評し「結局詮じ詰めれば此の點に於ける彼の說はフィズィオクラットの重農主義に歸着するのである、即ち彼の論を徹底さすれば必ず農業を唯一の生產的勞働とせねばならないであらう」と（ブルーガム全集本第一卷二六九頁）批評して居るが此の論の當否は姑らく措き、スミスの富國論に含まれたる根本思想の多くがフィズィオクラットの範疇を出でないと云ふことは無難に言ひ得らるゝであらう、富國論の骨組が佛國滯在中（三年間）に出來て居つたかどうかは第二の問題とし又彼の思想上にフィズィオクラットの勢力がどれ程及んで居つたかどうかは明確ならずとするも、兎に角兩者の所論に共通の點甚だ多く、スミスを近世經濟學の開祖とすればケネーも亦其の開祖の一人たることは明かである、故に余は近世經濟學の淵源を探究するにはケネーより着手するを順序なりと信ずるのである、從來久しく不明として傳へられ、若くは前人未發の新說などゝ稱せられたるケネーの學說は果して何處くより由來したるものなるか、此の祕密を藏する玉手匣の鍵を手にする者は果して何人であるか、余は開けて悔しき玉手匣の嘆あらんことを恐るゝも、更らに他日を待つて此の祕密を開けて見んと欲するのである。